「『祈りの本質』についてのこのような考察は、今日好まれません。今日では、例えば、『さて、私たちがおあれこれと願ったとしても、一体その祈りが世界の流れの中で何を変えるというのだろうか？　世界は私たちには変えることのできない必然の法則で進んでいるではないか！』というような声を聞きます。本当に一つの力を認識しようとするなら、その力があるところではそれを探さなければなりません。私たちは今日、祈りの力を人間の魂の中に求め、それが魂を先に進ませる何かだということを発見しました。そして、世界の中で働くのは霊、空想的でも抽象的でもない、具体的な霊であり、人間の魂は霊の国に属しているのだということをそこで知る人は、世界の中では物質的諸力だけが外的必然的な法則に従って働いているのではなく、霊的存在者としてあるものすべてが、これら存在者たちや諸力の働きが外的な目や外的な科学にとって見えるものではないとしても、世界の中で働いているのだということもまた知るでしょう。ですから霊的な生活を祈りによって強めるならば、あとはその働きを待つだけでよいのです。それは来るのです。しかし、まずは自分で祈りの力を現実のものとして認識した人が、はじめて祈りの働きを外的世界の中に求めるわけです。

　それを認識した人は、一度次のような実験をしてみるといいでしょう。まず人生の中で十年にわたって祈りの力を軽んじた後で、この十年の、祈ることなく過ぎた人生を振り返ります。そして次に、祈りの力を認識した、やはり十年の時の流れを後にして、この二番目の時期を振り返ります。そうすれば、自分が祈りによって魂に注ぎこんだ力の影響の下で、いかに人生の流れが変化したかがわかるでしょう。力というものはその働きによって示されます。その働きをまったく呼び起こさないならば、力を否定することは簡単です。祈りを自分の中に作用させようと全然しなかった人にどうして祈りの力を否定する権利があるでしょうか！　あるいは、光を生み出したり、それに近づいたりしたことが一度もない人が、光の力を知ってると人は思うでしょうか？　魂の中で、そして魂を通して働くべき力は、ただその力を使う時にのみ、それを認識することを人は学ぶのです。

　祈りのさらなる働きに立ち入るには、どうかこのことを了承していただきたいのですが、たとえ先入観なしにその中に見をおいたとしても、現代はまだそれにふさわしい時ではありません。と言いますのは、儀式集会の中から生じる、かの諸力が合流すると、さらに霊の力が高まり、そしてそれによって現実性の力も高まるということを把握するには、私たちの時代理解に特定の要素がまだもたらされていないからです。その理由から、今日は、祈りの内的な本質として私たちの魂の前に現れたもので満足したいと思います。またそれで十分なのです。なぜなら、それに対する理解をいくらか持っている人は、今日祈りに対してあまりに簡単にとなえられる幾多の異議を乗り越えて先へと進んでいくでしょうから」ルドルフ・シュタイナー

その十二年後の１９２２年、ルドルフ・シュタイナーはひとつの新しい「儀式集会の祈り」の創設に助力を与えました。それによってキリスト者共同体の儀式と活動がはじまったのです。

ハンス＝ヴェルナー・シュレーダー/輿石祥三訳

「祈り　修練と経験」pp.１４０－１４２　涼風書林　2008

ハンス＝ヴェルナー・シュレーダー

1931－200？　ハイデルベルグ大学、チュービンゲン大学で神学と自然科学を学ぶ。1955年司祭に就任。1968年自由大学指導者に招聘される。キリスト者共同体代表もつとめる。退任後も自由大学で教鞭をとっている。

祈りは

私が自分の運命を正しく体験し、

引き受け続け、

絶望することがないようにし、

私自身と他の人のために愛を心の中に与え、

人生がもたらすものを正しい仕方で得る力を与える・・・・